名木不光寺遺跡

- 古鏡が出土した中世屋敷跡 -

上席調査研究員 日 暮 冬 樹

遺跡の立地と周辺の遺跡

名木不光寺遺跡は、北方にある利根川に開かれた 大きな谷から伸びる小支谷に、東西を挟まれたやや 幅広い舌状の標高約39mの下総台地上に位置する。

名木不光寺遺跡の周辺では、南城砦跡・名木長稲 葉遺跡・名木大台遺跡・名木天神台遺跡・名木長稲 葉遺跡が発掘調査されている。南城砦跡と名木長稲 葉遺跡では弥生時代後期の竪穴建物跡が検出され た。また、これら各遺跡では古墳時代後期から平安 時代までの集落跡が展開していることが明らかにされ、周辺に分布する名木大坂古墳群・名木媛宮古墳 群・名木長稲葉古墳群・西台古墳群・名木前原古墳 群といった古墳の分布と併せて、この地域の繁栄を うかがい知ることができる。

この地域は、中世には神崎荘西端域にあたり、千葉一族神崎氏の系譜に連なる南城氏が存在した。この周辺の有力な武家である大須賀氏と神崎氏の家系から派生した名字の分布等から、この地域が大須賀氏と神崎氏の勢力圏の境目付近であったことが想定される。名木不光寺遺跡の西部にある南城山常福寺は、延応元年(1239)に開基され、寛永 2 年(1625)に中興されたと言われる。なお、常福寺の南西 500 m先の台地縁辺部には、名木城跡がある。

発掘調査の概要

名木不光寺遺跡は、これまで3度にわたる発掘調査が行われている。まず昭和62年(1987)に、(財)千葉県文化財センターが3,500㎡を発掘調査した。(財)香取郡市文化財センターは、平成4~5年(1992~1993)に14,850㎡、平成15年に450㎡と2度にわたり調査を実施している。

これらの調査によって、名木不光寺遺跡の変遷が

ある程度解明された。この遺跡は、縄文時代には陥 穴を用いた狩り場であった。5世紀末頃から竪穴建 物が作られるようになり、6世紀にはその数が次第 に増えていった。そして7世紀になると数多くの古 墳が形成される墓域となった。その後、一時的な断 絶を経て、平安時代には竪穴建物跡と掘立柱建物か らなる小規模な集落をなし、中世になると墓域を伴 う生活空間になっていったことが指摘されている。

そして、4度目の発掘調査として、平成24~26年にかけて、(公財) 印旛郡市文化財センターが道路建設に伴う調査を実施した。この調査では、名木不光寺遺跡において、3つの地点(第2地点 1,240㎡、第3地点 3,360㎡、第4地点 515㎡)、総面積5,115㎡が本調査された。今回の調査によって、古墳時代集落跡の新知見を得ることができ、新たに発見された中世の屋敷跡の西側部分を除く主要な部分が調査された。

古墳時代後期の集落跡

これまで名木不光寺遺跡では、古墳時代後期の竪 穴建物跡が70軒検出されていた。今回の調査では、 新たに第2地点において7軒、第3地点にて2軒、 第4地点では5軒の竪穴建物跡が発見された。ただ し、第2地点における4軒、第4地点の1軒は、建 物跡の一部分が既に調査されていたものであるの で、古墳時代後期竪穴建物跡の総数は79軒となる。 この結果、古墳時代の集落跡が、竪穴建物跡がまば らに台地全体に点在している状態から台地西南部に ある程度集中するようになり、その後次第に台地の 南東部~北東部に広がっていった状況が明らかにな りつつある。

中世屋敷跡

今回発見された中世屋敷跡は、名木不光寺遺跡第3地点に所在し、1辺約60mのほぼ方形を呈し、周囲を土塁と溝によって囲まれている。ただ、南西部の一部区画は突出しており、南東部は地形によって不整形になっている。

その中央部は方形を意識した削平によって、周辺より一段低い空間が造り出されている。この台地整形部分を中心として、掘立柱建物跡や地下式坑・竪穴状遺構・粘土貼土坑といった遺構が分布しており、その外縁部分では、遺構の密度がやや薄くなる。特に外縁南西部は、一段低く削平されており、ほとんど遺構がない。また、屋敷内には塚が5基所在しており、その盛土に原始古代から近世に至る遺物が混在している。

屋敷跡の出土遺物

出土遺物は、貿易陶磁である青磁・青白磁、瀬戸 美濃系天目茶碗・平椀・端反皿・卸皿・瓶子、志野 系皿、内耳鍋、かわらけ、古銭、銅製品、石製品 (宝篋印塔・硯・砥石等)がある。遺物の年代幅は、 13世紀~17世紀初頭の遺物であり、その主体は15世紀前半~中頃と考えられる。

出土した遺物のうち、注目されるのが、2号溝北辺の中層よりやや低い部分から出土した豊作吉兆を示す花と夫婦和合の象徴であるオシドリが描かれた「瑞花鴛鴦八稜鏡」である。大きさは10.5cm、重さ136.1gを呈し、鏡としては小振りなものである。鏡に厚さがあり、鈕が高いといった特徴から、鏡式からすれば11世紀代に遡り得るものであるが、より後出の可能性が指摘できる。鏡面には、鏡を磨いた銀メッキが残る。鏡の模様の状態から、元となる鏡から型取り複製された可能性が指摘されている。

千葉県内における鏡の出土例は、土坑墓等に伴う ものが多く、屋敷跡の溝から出土する例は珍しい。 この八稜鏡は、名木不光寺遺跡の中世屋敷の当初の 性格を反映している重要な遺物と言えるであろう。

屋敷の変遷

屋敷を廻る1号溝・1号土塁の内側、北辺から東辺にかけて2号溝が走る。2号溝の北辺は深さ約1.5 mであるが、西~南辺はかなり浅くなり、深くても30 c mほどである。土層堆積状況から、2号溝は1号溝・1号土塁より古いと考えられる。

また屋敷跡南辺には、廻っている溝が断絶する部分があり、往時にはこの部分が出入り口となっていたことが推定される。一方その出入り口部分を遮断するように1号土塁は構築されているので、屋敷を囲郭する溝よりも1号土塁は新しいものと思われる。ただし、構築された時期は異なるが、溝と土塁双方の位置関係を考慮すると、同時に機能していた時期は短くないものと思われる。

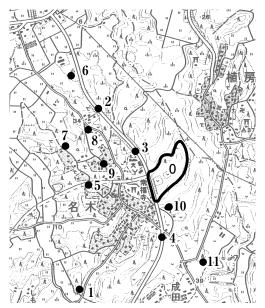
溝と土塁の状況から、この中世屋敷の変遷を追うと、一番初めに築かれたものは、2号溝によって台地先端と区画された屋敷であろうか。2号溝が廃絶すると、1号溝によって囲郭され、屋敷南辺中央に出入り口を持つ屋敷となった。その後1号土塁が築かれ、屋敷の出入り口が南辺から、現況で1号土塁の分断が見られる東辺・西辺・北辺に移動したものと思われる。

交通の要所

貞享5年(1688)作成「名木・青山・中里三箇村 絵図」(『村絵図集成 下総町史史料集別巻』1993 年)は、当該地区を不整形な方形で括っており、こ れは屋敷跡を示している可能性がある。注目すべき は、この地点に四方から道が集まり、交通の結節点 となっていることである。

これらの道が台地を降った西方先には、台地上に 植房地区がある。名木と植房は、至徳2年(1385) に神崎荘内御祭礼役8石5升を一緒に賦課されてお り、往時の関係は深く、両地区を結ぶ道も現在より 重要であった可能性が高い。これらのことは、この 地点の交通における重要性を示しているであろう。

なお、現在これらの調査成果は整理作業中であり、 今回の発表内容は、さらなる検討を要していること を注意されたい。



周辺の遺跡

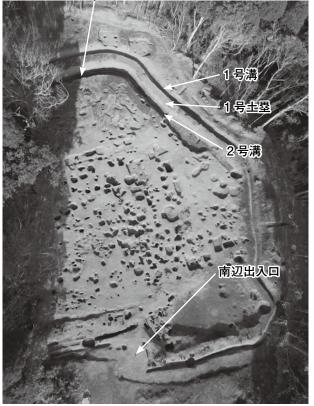
- 0. 名木不光寺遺跡
- 1. 名木城跡・南城砦跡
- 2. 名木長稲葉遺跡
- 3. 名木大台遺跡
- 4. 名木天神台遺跡
- 5. 名木的場台遺跡
- 6. 名木大坂古墳群
- 7. 名木媛宮古墳群
- 8. 長稲葉古墳群
- 9. 西台古墳群
- 10. 名木大久保古墳群
- 11. 名木前原古墳群



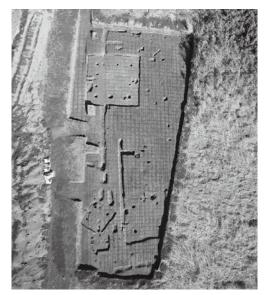
名木不光寺遺跡第2地点空撮



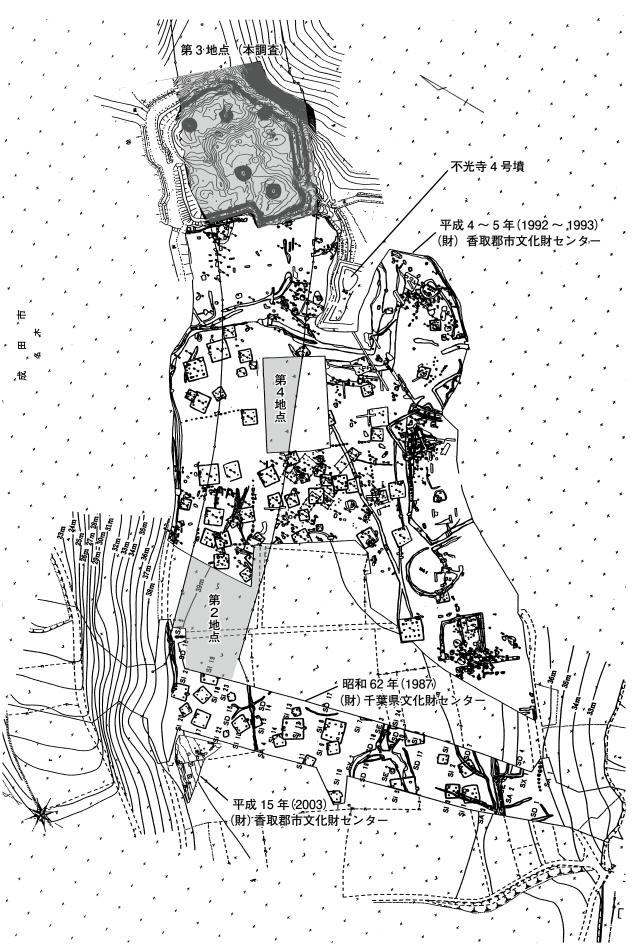
出土した八稜鏡



名木不光寺遺跡第3地点空撮



名木不光寺遺跡第4地点空撮



名木不光寺遺跡調査地点位置図(1:1,500)